

「目の見えない人」

マルコの福音書 8:22～26

はじめに

【新改訳 2017】ヨハネの福音書

14:1 「あなたがたは心を騒がせてはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい。

14:2 わたしの父の家には住む所がたくさんあります。そうでなかったら、あなたがたのために場所を用意しに行く、と言ったでしょうか。

14:3 わたしが行って、あなたがたに場所を用意したら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えませます。わたしがいるところに、あなたがたもいるようにするためです。

【新改訳 2017】ピリピ人への手紙

3:20 しかし、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、私たちは待ち望んでいます。

私たち教会の中に広く信じられている福音、それは私たちが「やがて天に行く」というものです。そしてその神のみもとである天の御国で、私たちは永遠に生きていくと信じられています。しかし神のご計画はそれで終わりではありません。神は私たちが今生かされているこの地上にも御国を建てようとしておられるのです。神に敵対する悪魔どもを捕らえ、その悪行をやめさせ、アブラハム、イサク、ヤコブ、そしてその子孫であるイスラエルの民に神が約束された「神の国」をこの地上に、神の御子メシアであるイエシュアによってこれをお建てになるというご計画を、神はお持ちなのです。聖書を読む上で私たちが犯しやすい過ち、それは常に自分は、自分たちはどうなるのだろうという視点、観点で聖書を読んでしまうことです。聖書は確かに人に与えられたものですが、人を紹介し、人についての説明をするための書物ではありません。聖書は神について、神がどのような御方で、何をなされ、何をなさそうとしておられるのかという、神の御心、み旨、ご計画が記された書物なのです。ですから今日もそのような視点で聖書の御言葉を学んでまいりましょう。

1. ベツサイダ

【新改訳 2017】マルコの福音書

8:22 彼らはベツサイダに着いた。すると人々が目の見えない人を連れて来て、彼にさわってくださいとイエスに懇願した。

イエシュアは弟子たちを引き連れて、ベツサイダ(בֵּית צִיְדָה)という町にやって来られました。ヘブル語で「漁師の家」という意味のこの町の名は、実は神の国を直接的に指し示しています。なぜならここに使われている「漁師」という意味のヘブル語ツァイド(צִיד)は本来、このような意味で使われた言葉だからです。

【新改訳 2017】創世記

10:8 クシュはニムロデを生んだ。ニムロデは地上で最初の勇士となった。

10:9 彼は【主】の前に力ある狩人であった。それゆえ、「【主】の前に力ある狩人ニムロデのように」と言われるようになった。

このように、本来ツアイドは、「狩人」つまり網ではなく弓と矢で獣を捕る「獵師」のことで、そして「地上で最初の勇士」「【主】の前に力ある狩人ニムロデのように」なる存在を指す言葉として使われました。このような意味を持った場所に、イエシュアは弟子たちを導かれました。それはこの弟子たちに対する以下の神のご計画を指し示すためだと考えられます。

【新改訳 2017】マタイの福音書

19:28 そこでイエスは彼らに言われた。「まことに、あなたがたに言います。人の子がその栄光の座に着くとき、その新しい世界で、わたしに従って来たあなたがたも十二の座に着いて、イスラエルの十二の部族を治めます。

イエシュアは弟子たちに対してこのように預言、約束しておられるのです。やがてイエシュアはこの地上に再臨されます。そしてすべての悪を一掃し、この地に「新しい世界」新しい国を建てられます。「神の国」また「御国」、「メシア王国、千年王国」と呼ばれるものがそれです。それはアブラハム、イサク、ヤコブの子孫であるイスラエルの民、ユダヤ人も呼ばれる彼らによって地上のすべての民族、部族、国々が統治され、そのことによってすべてのものが神の祝福の中に生かされるという国、世界です。さらにその「イスラエルの十二の部族」の上に立てられる、十二人の族長としてイエシュアはこの弟子たちを選んでおられるということです。やがて地上に再臨されるイエシュアがイスラエルの王なるメシアとして立てられるその時、彼ら十二弟子たちもその傍らにともに立つのを、私たちは見ることとなります。それが「彼らはベツサイダに着いた。」という、非常に短く、一見何の変哲もないただの状況説明のようにしか見えない記述ですが、そのような神のご計画がここには表されていると考えられます。

またマルコの福音書ではこのベツサイダはすでに 6:45 で登場しました。しかしその時はこれを目的地として出発はしたものの、結局辿り着くことができず、その後いろいろな場所を巡り、いくつかの出来事を経て、今日の箇所であるこの 8:22 の時点でようやくこのベツサイダに辿り着いています。ベツサイダに向けて出発してから、実際に辿り着くまでのその足取りとおもだった出来事は以下のようなものです。

- ・「ベツサイダ」に向けて弟子たちが舟で出発。途中、イエシュアが湖の上を歩いて追いつかれる。(6:45)
- ↓ゲネサレの地に到着。癒しの御業をなされる。パリサイ人、律法学者と議論を交わされる。(6:53)
- ↓ツロに到着。悪霊につかれたギリシア人の娘を癒される。(7:24)
- ↓シドンへ、そしてデカポリスを通ってガリラヤ湖へ到着。四千人の給食の奇蹟をなされる。(7:31)
- ↓ダルマヌタ地方へ。パリサイ人たちと再び議論。(8:10)
- ・「ベツサイダ」に到着。(8:22)

これらのイエシュアとそして弟子たちの動き、足取りは、神の国の福音すなわち神のご計画がどのようにして実現していくのかということを表したものであると考えられます。すなわち神の国の福音は初め、イエシュアとそして弟子たちによってパリサイ人、律法学者たちをはじめとするユダヤ人たちに宣べ伝えられ、表されました。それがゲネサレの地に行かれた事実に示された「型」です。しかし彼らがイエシュアとその福音を拒んだため、後に福音はツロ、シドン、デカポリスに象徴される異邦人の地、私たち異邦人に届けられたのです。以前述べた四千人の給食の奇蹟は、イエシュアを信じ、その福音を受け入れた異邦人、すなわち私たち教会に与えられる救いを指し示したものであることを述べました。このように、ユダヤ人から異邦人の教会へと渡った福音ですが、やがて再びユダヤ人のもとに届けられ、その時彼らの目が開かれ、イエシュアを神の御子メシアとして受け入れるようになるという事実が、そのような神のご計画が表されているのがダルマヌタ地方から、今日のこのベツサイダでの出来事であると考えられます。イエシュアを神の御子メシアとして認めず、受け入れず、今もなお閉ざされ続けている彼らイスラエルの民の心の目が、どのようにして開かれるのかという視点で、次の箇所からの記述を読み進んでまいりたいと思います。つまり、ベツサイダに着いたイエシュアのみもとに連れて来られたこの「目の見えない人」とは、イエシュアを信じないイスラエルの民を表しているということです。

2. さわってください

まず「人々が目の見えない人を連れて来て、彼にさわってくださいとイエスに懇願した。」とあります。ここに使われている「さわる」という意味のヘブル語ナーガ(נָגַגְתִּי)、この言葉は本来以下のような出来事に記されました。

【新改訳 2017】創世記

3:3 しかし、園の中央にある木の实については、『あなたがたは、それを食べてはならない。それに触れてもいけない。あなたがたが死ぬといけないからだ』と神は仰せられました。』

これはエデンの園で神がアダムに命じられたことについて、アダムの妻エバが蛇に語ったものです。「園の中央にある木の实」善悪を知る知識の木の実とも呼ばれる、これに「触れ」ることが聖書で最初のナーガの持つ意味であり、それはすなわち「死ぬ」ことを指し示していました。ですから「彼にさわってください」とは、イエシュアが死ぬことを求める、イエシュアが殺されることが表された記述であると考えられ、それはすなわち、イスラエルの民の盲目さ、つまり彼らがイエシュアをメシアであることを信じず、拒絶したこと、そして殺してしまったというあのイエシュアの十字架の死の事実が表されていると考えられます。このイエシュアの死によって、イスラエルのすべての罪が贖われる、赦されることとなりました。「目の見えない人」は、結果的にイエシュアがナーガ「触れ」ることで癒されます。ですからここにはイエシュアの十字架の死による、イスラエルのすべての罪の贖いの事実が「型」として表されていると考えられます。

3. 村の外に

【新改訳 2017】 マルコの福音書

8:23 イエスは、その人の手を取って村の外に連れて行かれた。そして彼の両目に唾をつけ、その上に両手を当てて、「何か見えますか」と聞かれた。

そしてイエシュアはその目の見えない人を「村の外に連れて行かれ…彼の両目に唾をつけ」られたとあります。ここに二つの大きな問いが生まれます。それはなぜ「村の外に連れて行かれ」たのかということ、そしてなぜ「彼の両目に唾をつけ」られたのかということです。この二つの問いに同時に答える記述が民数記の12章にあります。

【新改訳 2017】 民数記

12:13 モーセは【主】に叫んだ。「神よ、どうか彼女を癒やしてください。」

12:14 しかし【主】はモーセに言われた。「もし彼女の父が彼女の顔に唾したら、彼女は七日間、恥をかかされることにならないか。彼女を七日間、宿営の外に締め出しておかなければならない。その後で彼女は戻る事ができる。」

この出来事はモーセの姉で預言者でもあったミリアムが、神がモーセだけを特別な存在として選んでおられたことに納得がいかず、不満をもらしたという場面です。神である主はそんな彼女の声に対して怒られ、彼女をツアラアトで打たれました。モーセはミリアムのために主にとりなしましたが、その時主が語られた御言葉の中に「顔に唾したら」そして「宿営の外」という二つの言葉があり、イエシュアのなされた行為との結びつきが考えられます。つまりイエシュアは、神に不満をもらし、その御心を理解し受け入れられなかったミリアムと、この「目の見えない人」を重ね、またご自分とその時のモーセを重ねておられるのだと考えられます。神の呪いの象徴であるツアラアトに冒され、宿営の外に締め出されたミリアムでしたが、モーセのとりなしによって七日後には癒され、再び宿営の中に戻ることができました。この出来事同じようにこの「目の見えない人」に表されたイスラエルの民もまた、イエシュアの十字架の死というとりなしによって、神の赦しと選びの中に戻されるということが表されていると考えられます。

そしてイエシュアは彼の目に手を「当てて」ともありますが、ここに使われている「置く」という意味のスィーム(רָשַׁם)は本来、創世記 2:8 で神がエデンの園に人を「置かれた」という意味で使われた言葉です。このエデンの園は「神の国、御国」におけるイスラエルの国土、特にその首都であるエルサレムを直接的に指し示す「型」です。神のご計画は、このエルサレムを中心とするイスラエルの地に、すべてのイスラエルの民を集め、そこにスィーム「置く」というものであり、今日もお世界中に離散しているこの民が、やがてイエシュアが再臨される時、この御方によって呼び集められ、先ほどの再び宿営の中に戻ることができたミリアムのように、イスラエルの民がイスラエルの地に置かれるということが、イエシュアの「目の見えない人」になされたこの行為には表されていると考えられます。

4. 木のような人

【新改訳 2017】 マルコの福音書

8:24 すると、彼は見えるようになって、「人が見えます。木のようにですが、歩いているのが見えます」と言った。

ここで彼はイエシュアによって癒され、見えるようになるのですが、非常に不思議なことを口にしていきます。「人が見えます。木のようにですが、歩いている…」これは一体何でしょうか。この時はまだ癒され方が不十分で、人と木の見分けもつかないほどだったのではないかと考えられますが、イエシュアはたとえ触れなくても御言葉ひとつでどんな病も完全に癒すことのできる御方です。再度手を当てておられますが、失敗などあり得ません。彼が見たこの「木のようにですが、歩いている（人）」とは一体何だったのでしょうか。実ははこの木も人も複数で、正確には「木々のような、歩いている人々」です。そしてここで「木」と訳されているヘブル語はイーラーン(אֵילָן)と言い、ダニエル書の4章のみで使われている言葉です。

【新改訳 2017】 ダニエル書

4:10 私の寝床で幻が頭に浮かんだ。私が眺めていると、見よ、地の中央に木があった。それは非常に高かった。

4:11 その木は生長して強くなり、その高さは天に届いて、地の果てのどこからもそれが見えた。

4:12 葉は美しく、実も豊かで、その木にはすべてのものの食べ物があった。その木陰では野の獣が憩い、その枝には空の鳥が住み、すべての肉なるものはそれによって養われた。

4:13 寝床で頭に浮かんだ幻の中で見ていると、見よ、一人の見張りの者、聖なる者が天から降りて来るではないか。

4:14 彼は力強く叫んで、こう言った。『その木を切り倒し、枝を切り払え。その葉を振り落とし、実を投げ散らせ。獣をその下から、鳥をその枝から追い払え。』

4:15 ただし、その根株は、鉄と青銅の鎖をかけて、地に、野の若草の中に残せ。天の露にぬれさせて、地の青草を獣と分け合うようにせよ。

4:16 その心を、人間の心から変えて、獣の心をそれに与え、七つの時をその上に過ぎ行かせよ。

4:17 この宣言は見張りの者たちの決定によるもの、この要請は聖なる者たちのことばによるもの。これは、いと高き方が人間の国を支配し、これをみこころにかなう者に与え、また人間の中の最も低い者をその上に立てることを、いのちある者たちが知るためである。』

これはバビロンの王ネブカドネツアルが見た幻、夢についてのものです。ここに使われている「木」がイーラーンです。この夢を解き明かしたダニエルはこの「木」とはネブカドネツアル王本人を指しており、王の身にこれからどのようなことが起こるのかが神によって示されたものであると言っています。この当時ネブカドネツアルのバビロンは世界最大最強の帝国で、イスラエルの民もこのバビロンの奴隷となりました。つまり彼は全世界を支配し、この夢に表された「木」イーラーンそのものでした。しかしやがてこのバビロンはメディア・ペルシアに倒され、支配されるようになります。そしてやがてこのメディア・ペルシアもまたギリシアによって倒され、そしてさらにこのギリシアもローマによって支配されるようになるのです。イエシュアによって癒された彼が見た「木々のような、歩いている人々」とは、かつて全世界

を支配し、そして滅ぼされていったこれらの国々の王たちを表していると考えられます。そして世の終わりには、最後の「木」である反キリストが現れます。今日の私たちが生きている世界は、多くの国家、権力が乱立し、しのぎを削っているような状態ですが、そう遠くない将来、この世界を一つにまとめようとする、つまりたった一人で全世界を支配しようとするこの最後の「木」である反キリストが必ず現れます。この人物こそまさに「その心を、人間の心から変えて、獣の心」を与えられる、ヨハネの黙示録で「獣」と称されている存在です。この最後の「木」ある反キリストはかつてのバビロン、ローマをも凌ぐ権力を手にし、自らを神とし、自分に逆らう者たち、特にイスラエルの民、ユダヤ人たちを根絶やしにしようとします。しかしこの反キリスト、黙示録の「獣」もまた滅ぼされます。地上に再臨されるイエシュア、神の御子メシアであるこの御方がそれをなされます。

5. はっきりと

【新改訳 2017】 マルコの福音書

8:25 それから、イエスは再び両手を彼の両目に当てられた。彼がじっと見ていると、目がすっかり治り、すべてのものがはっきりと見えるようになった。

「イエスは再び両手を彼の両目に当てられた。」この行為にイエシュアの再臨、「再び」この地上に来られることが表されていると考えられます。彼の目は「はっきりと見えるようになった。」とありますが、ヘブル語直訳では「遠くまでよく見える」となり、ここに「遠い、離れた」という意味のラーホーク(קרחוק)が使われています。この言葉の最初の言及は創世記 22:4 です。

【新改訳 2017】 創世記

22:1 これらの出来事の後、神がアブラハムを試練にあわせられた。神が彼に「アブラハムよ」と呼びかけられると、彼は「はい、ここにおります」と答えた。

22:2 神は仰せられた。「あなたの子、あなたが愛しているひとり子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。そして、わたしがあなたに告げる一つの山の上で、彼を全焼のささげ物として献げなさい。」

22:3 翌朝早く、アブラハムはろばに鞍をつけ、二人の若い者と一緒に息子イサクを連れて行った。アブラハムは全焼のささげ物のための薪を割った。こうして彼は、神がお告げになった場所へ向かって行った。

22:4 三日目に、アブラハムが目を上げると、遠くの方にその場所が見えた。

これは神がアブラハムに彼の息子イサクをささげるように命じられた場面です。神は「モリヤの地」の「一つの山の上」をその場所として指示し、アブラハムは「遠くの方に」それを見たとあります。この場所は後のエルサレムで、神殿が建てられる場所です。(歴代誌Ⅱ 3:1) かつてダビデの子ソロモンによって、またメディア・ペルシアの王クロスの命令によってこの場所に神殿が建てられました。イエシュアの地上再臨の暁には、再びこの場所に神殿が建てられます。ですから「再び」手を置かれたイエシュアによって「すべてのものがはっきりと見えるようになった。」彼の目は、イエシュアによって建てられるエルサレムの神殿を見つめるイスラエルの民の姿を表していると考えられます。

6. 永遠の家

【新改訳 2017】 マルコの福音書

8:26 そこでイエスは、彼を家に帰らせ、「村には入って行かないように」と言われた。

そしてイエシュアは、目を癒された彼を「家に帰らせ」ました。ここには「手を伸ばす、遣わす」という意味のシャーラハ(נְשַׁרַח)が使われており、この言葉は本来、創世記 3:22 に記されたエデンの園に生えていたいのちの木に「手を伸ばし」その木の実を食べ、永遠に生きるものとなることを指し示した言葉です。再臨のイエシュアによって建てられる「神の国」は、もはや二度と滅びることも滅ぼされることもなく、永遠に生きる、永遠に続く神の「家」です。その事実が、神のご計画がここには表されていると考えられます。

ユダヤ人たちは今日でもシオンとも呼ばれるエルサレムの神殿の場所を指して神の「家」、私たちの「家」という意味を込めてバイト(בַּיִת)と呼んでいます。神である主ご自身もこうっておられます。

【新改訳 2017】 詩篇

132:13 【主】はシオンを選びそれをご自分の住まいとして望まれた。

132:14 「これはとこしえにわたしの安息の場所。ここにわたしは住む。わたしがそれを望んだから。

132:15 わたしは豊かにシオンの食物を祝福しその貧しい者をパンで満ち足らせる。

このように、神は地上にある明確な一つの場所を指して「ここにわたしは住む」と言っておられます。天ではありません。ましてや私たち人の心や思いの中などという抽象的な場所でもありません。現在のイスラエルの首都エルサレムこそがそれなのです。しかし今ではありません。やがてイエシュアが再臨されるその時、この御言葉が成就、実現します。その時は私たちもともにそこに行くことになります。ぜひ思いめぐらしてみてください。神のご計画の完成に思いを馳せてください。それが、それこそが私たちの持つべき思い、見るべき夢です。そのための私たちの霊の目が開かれていきますように。イエシュアを、神の国を待ち望みましょう。父なる神からの、聖霊の助けと導きが豊かにありますように。